

Title	重建二十五年に際して
Author(s)	仲田, 應弘; 音代, 節雄; 岡田, 主次
Citation	懐徳. 1941, 19, p. 42-47
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89078
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

西村天囚先生

眞率の訓を今に秋涼し

重建二十五年に際して（三篇）

△思ひつくまま

仲田應弘

松山直藏先生は、茶話會の席上で、懷徳堂は民衆的大學だと云はれた。其の頃は、文學科、定日講義、素讀科があつた。私は山本檜信氏の斡旋で聽講する様になつたのだが、山本氏に紹介して下さつたのは、山本氏の祖父梅川豊吉郎翁で、梅川翁は山本氏の宅で、私を紹介して下さつた。

私が初めて懷徳堂へ行つた時は喜田博士の講演であつた。林森太郎先生は新古今和歌集を、松山先生は周易程傳を講じてゐられた。あれだけ廣い講堂で雜談する者もなく、講義中は水を打つた様な靜肅さで、神神しい思ひさへ湧くのであつた。大阪の中央部で、これだけ靜かな所のあるのが不思議なくらゐであつた。中には酒に酔うて來られた人もあつたが、そんな人は程なく停めてしまつた。懷徳堂の空氣には耐へられなかつたものと思ふ。

歸りの市電では松山先生は自宅からの距離をきかれたりして、種種激勵して下さつた。座席を譲つ

ても君は遠いからと、強いて吊皮につかまつてゐられた事もあつた。松山先生は、いつも我我と共に林先生の講義を聴いてゐられた。

其の後、茶話會には理事者達の御出席を乞ふ様になつて、成田軍平氏、江崎政忠氏、勝本忠兵衛氏などがお話下さつたが、勝本氏の何でも大地に足をしつかりと着けて強行してゆかれる意力に感動された。令息が洋行されたことにも觸れてゐられた。こんな方が度度出席される様だと、聽講生の意志の鍊成に多大の影響する所が大きいものと期待してゐたが、一回で残念だつた。

國史料は佐々本恒清先生が、富尾で奇禍に遇はれてから休講になつた。人間を作るにも、何を行ふにも、國史研究の必要を痛感してゐた私は、國史講座の復活を叫んで江崎政忠氏に手紙を差上げたことがあつた。

見學會には諸權威を招聘してゐるので得る處大きく、天沼先生の御蔭で、私の村の荒山神社の建築のよさを發見、村民に敬神崇祖の信念を深からしめたのも、源先生の御伴をした神護寺で、室を閉め切つて國寶軸物の修理をしてゐるのを見て、私の職業である表装の技術上、劃期的に悟らされたりした喜びなど枚擧に遑がない。

阪倉先生の詳細な講義は國文法趣味を覚えしめ、中村直勝先生に依つて、國史を愛好する様になつた事も銘すべきである。

懷德堂は、教ふると共に自ら悟り得るゆとりを與へる所であると思ふ。私は門を潜つて二十年になるが、未だ悟入するには道遠い憾がある。私の生存する限り懷德堂に通うて、聖賢の懿徳を偲びつつ一步一步悟りの生活を深め、以て人間鍊成に努めたいと思ふ。

最近、小倉理事長が大臣になられたが、理事長として進んで盡力して下さるよ力で力強く思ふ。なほ理事長の言はれた「か勤」によつて、悟道精神を推進してゆきたいと念願してゐる次第である。

△懷德堂の學恩を懷ふ

音 代 節 雄

懷德堂の洪大無邊なる學恩は、私一個人の場合のみでなく、本堂が一般民衆に汎く開放的である爲に、萬人に等しく感謝されてゐるのである。私は大正十一年春から本堂の恩恵に浴してゐるが、當時の定日講義は、松山直藏博士の大學衍義、武内義雄先生の曾國藩文集、林森太郎三高教授の古今集の講義があり、日曜には松山先生の四書の講義が繰返されてゐた。土曜の定期講演には、榊亮三郎博士の印度の美術と其潮流や、野上博士の心理講義や、原勝郎博士の日本文化の過程等の講座があつた。大正十二年から文科講義が金曜に開講され、藤井健治郎博士のカントの道徳哲學の基礎（獨逸語原書講讀）、松山博士の朱子語文精要、鈴木虎雄博士の杜詩評鈔、藤代禎輔博士のゾラ（後にゲーテのフ

アウストの原書講讀)などが講義題目であり、第一日の開講日には大講堂立錫の餘地なき程の盛況であつた。定日講義は其後松山博士は理學宗傳や詩經を講ぜられ、武内先生が大正十二年三月に東北帝國大學に赴任せられた後任として、財津愛象先生が廣島高師から着任され、詩經や楚辭を講ぜられ、稻東猛先生は韓非子を講義された。林先生の講義は古今集、新古今集、新葉集、萬葉集、大鏡、枕草子と移つて行つたが、私が今日國文學徒の末席をけがして年報年鑑に名の出る様になつたのも、林先生の學恩に負ふ所が多い。思出の糸はたぐれども盡きず、今はなき松山先生、林先生、藤井先生、藤代先生、財津先生、稻東先生、原先生、柳先生の御膜福を祈る心持が切である。其他天沼博士の建築講座、澤瀉博士の萬葉講座、中村直勝先生の國史講座、源先生の美術講座並に各臨地講演は、私の古代憧憬は一層の拍車をかけ、其恩惠の深遠なる測り知るべからざるものがある。本堂の學燈永劫に燦然たらんことを切望して筆を擱く。

△懷德堂に學ぶの記

岡 田 主 次

私が懷德堂で初めて教へを受けたのは、昭和四年の春であつた。抑も私が懷德堂に憧憬を持つた最初は、明治の末期に朝日新聞に懷德堂記といふものが、西村天囚先生の筆によつて長期に渡つて掲載された事があつた。漢文を引用した相當読み難い記事であつたが、勉めて讀む事を自分の日課の如く

にし、又それを樂みの一にして居た。時たま／＼私の郷里（兵庫縣印南郡）の近くの加古川町へ、西村天囚先生がお越しになつて、講演せられた事があつた、此の時幸ひ聽講の機會を得たのであつた。

演題は「郷土誌の研究」といふ事であつたやうに記憶して居る。其の内容の主たるものは、第一は加古川沿岸にある船頭村（今は印南郡米田町に編入）の住人天竺徳兵衛が、印度へ渡航して其目的を果して菩提樹を持ち歸り、謠で有名なる高砂町の名刹十輪寺に獻納今尙繁茂して海國男子の面目を躍如たらしめた話、第二は同じく船頭村にある鹽冶判官高貞の七騎塚の話で、高貞は叛服常なき賊臣であるが、其の身代りとして打死したる七騎は忠烈である、故に文化十一年に古賀精里撰、賴春水書の碑文を建てたこと、加古川町の稱名寺に大莊屋中谷政敬が、七騎追弔の爲に加古川の小石に法華經を一石一字を書いて埋めた塔があり、其緣故を山陽が撰並に書して居る事を細説された。第三は山片蟠桃といふ人が加古川町に生れ、少年時代から大阪の船場邊の商家に丁稚奉公に住み込み、後、懷徳堂で學んだ、無論職業を大切にして、其の餘暇に勉學したのである。而して感心なことには、蟠桃は學問も追々進み、經濟學に通曉した。さうして經濟問題に關する著述を志した。其の著述の方法たるや、日常は仕事が忙しいので、人が午睡する時間を利用して之を作つた。其の書名を「夢の代」と云ふ、當時市民の經濟生活に必要な讀物であつた、と云ふ話をして、斯くの如く郷土を飾る人物の世に著はれたのも、懷徳堂の如き民衆的教化機關の存在して居た爲めである事を強調せられた。あの偉大な

西村先生が、眞摯なる態度で諄々と説かれた其の御姿は、今もハッキリ腦裏に残つて居る。さういふ譯で其の時から私は懷徳堂と結ばれて居たのである。私が神戸へ出てきたのは大正九年で、それから神戸高商夜學部で學ぶ事五ヶ年、其の後懷徳堂で、諸先生から正しき御導きを得たが、昨年易經の講義終了頃から急に業務繁激を加へて、學ぶに暇なき身となつた。併し私の頭は常に懷徳堂に在り、暇あれば堂門を潜つて、心身の修養に努めたいものと念願して居るのである。

